

## 第30回を迎えたクラウン新進吟詠家ジョイントリサイタルに想う

日本クラウン吟友会運営委員代表 海老澤宏升

2005年7月

本年で関東新進吟詠家ジョイントリサイタルが30回を迎えます。振り返って見ますとクラウン吟詠コンクールが始まり、続々と新人吟者が誕生する中で、飯干旭舟先生と若手だけでリサイタルをしたいね。と常々話し合っていました。妻鳥克風先生、先代海老澤宏升先生に相談したところ、開催しても良い雰囲気でありましたので、熱が冷めない内にと計画を練り始めました。

当時の吟界の大会は有料の会は殆ど無く、入場無料が当たり前で、合吟コンクールで人集めを行い、出演者から会費を集めて運営資金にしていました。飯干先生と計画したのは入場料の収益で運営すること。出演者は日本クラウン吟友会コンクール入賞者をメインにすること。観客を魅了する企画を計画することを条件に進めました。タイトルは色々な流派の吟詠家が参加する事と吟剣詩舞、演奏家が一同に集まる会ということ、そしてコンクールで入賞したフレッシュな吟詠家の集合体なので新進吟詠家ジョイントリサイタルと致しました。

観客が魅了する吟詠、新しい吟詠伴奏、洗練された舞台構成を考えるべく、第1回のプログラムの表紙を斬新なものにと、私の友人のイラストレーターにデザインを依頼致しました。若い女性の裸体をモチーフに二人の女性が手を伸ばしてジョイントする絵で、当時としては斬新であり私は素晴らしいと思いましたが、後で物議を醸す結果になるとは思いもありませんでした。

クラウン吟友会運営委員会に趣旨を説明し、本部からの援助は受けない

で独立採算制で行う旨を了解戴きました。会場は第一生命ホールで入場料が1,000円。出演者は関東から13名、近畿から4名、西日本から3名、北陸から1名。合計21名で想像以上の大成功であり次回の開催を多くの方から望まれました。終了後の報告会で、クラウン吟友会の数人の先輩からこのリサイタルについてクレームが入りました。

あのプログラムの表紙は何だ、詩吟のイメージが悪くなる、若手だけの吟詠では物足りない。次回から我々を参加させろ。それが不可能ならば次回の開催は駄目だと。将来のクラウン吟友会の為にと妻鳥先生、先代海老澤宏升先生が説得して戴きましたが、結局これが原因かどうかは判りませんが、数人の先生が吟友会から離れていきました。

30回の中には赤字になり飯干先生と穴埋めしたことや、企画構成「清水の次郎長」は多方面から何でこんな企画を？と言われてたり、アメリカ人尺八演奏家・ジョン海山ネプチューン氏の起用、プロジェクターで切り絵を投影する影絵の起用、芝居と吟剣詩舞等、紆余曲折の中で30回を開催して来ました。今では近畿、西日本、北陸、東海、北海道と5地区にジョイントリサイタルの輪が広がっていったのは隔世の感が有ります。又、日本吟詠界においてクラウンジョイントリサイタルの功績は計り知れないものが有ると自負しております。